

7
July

- 3 [土] イキウメ「外の道」
●PLAT主ホール
- 3 [土] ショパン(株)ミュージックアカデミー発表会
●PLATアートスペース
- 4 [日] 平原誠之 ピアノ・コンサート 豊橋公演
●PLATアートスペース
- 8 [木] 立川志の輔 独演会
●PLAT主ホール
- 11 [日]—12 [月]
豊橋演劇鑑賞会 第285回例会
劇団前進座『東海道四谷怪談』
●PLAT主ホール
- 17 [土] 聖徳太子没後1400年記念公演
絵解き「玉虫厨子の秘密」
●PLATアートスペース
- 20 [火] 社会人キャリアアップ連携協議会
講演会
「カーボンニュートラルとニューノーマル
～脱炭素社会実現を目指す
私たちの新たな生き方、行動様式～」
●PLAT主ホール
- 24 [土] 若手音楽家育成事業
犬塚沙希 ピアノ・リサイタル
『共鳴するところ』
●PLATアートスペース

8
August

- 1 [日] ブラヴィッシモ 音楽会
●PLATアートスペース
- 5 [木] 藤城抄知子バレエアカデミー 第5回発表会
●PLAT主ホール
- 9 [月] CBDC PARTY 2021
●PLATアートスペース
- 21 [土]—22 [日]
神野新田物語
第2話:開拓の時代(明治29年～昭和10年)
●PLAT主ホール
- 25 [水] 桜丘高等学校和太鼓部 第14回自主公演
●PLAT主ホール
- 28 [土]—29 [日] プラット親子わくわくプログラム2021
『めにみえない みみにしたい』
●PLATアートスペース
- 29 [日] 第54回 東三民踊まつり
●PLAT主ホール



表紙/田中 圭『もしも命が描けたら』
撮影:三瓶康友
裏表紙/池谷のぶえ「外の道」
撮影:中野建太
企画・発行/公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン/味岡伸太郎+有限公司STAFF
令和3年6月発行 50号[隔月発行]



PLAT
NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2021年7月—8月
vol. 50



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT



CONTENTS

表紙
『もしも命が描けたら』
田中 圭
2

INTERVIEW:1
イキウメ「外の道」
わからないものと、わからないまま、
どうやって付き合っていくのか。
前川知大
4

INTERVIEW:2
プラット親子わくわくプログラム2021
『めにみえない みみにしたい』
森の中に女の子が旅に出る。
として幻想を見て帰ってくる。
藤田貴大
INTERVIEW:3
夜の森へ誘うのは、この4人!
伊野香織・川崎ゆり子・成田亜佑美・長谷川洋子
8

INTERVIEW:4
『もしも命が描けたら』
舞台の生の空気感をお楽しみください。
田中 圭
10

若手音楽家育成事業
2021年上半年
コンサートラインナップ決定!
12

INFORMATION
PLAT主催公演情報
14

PURA PURA
バロコの寄り道ぶらぶら 桑原裕子
『エンタメにデアイマショー』
15

SUPPORT
TICKET CENTER

裏表紙
「外の道」
池谷のぶえ
PLAT CALENDAR

イキウメ

「外の道」

7月3日[土]13:00開演

作・演出＝前川知大

出演＝浜田信也、安井順平、盛 隆二、森下 創、大窪人衛

池谷のぶえ、薬丸 翔、豊田エリー、清水 緑

会場＝PLAT 主ホール

引っかかっている、なにかが。

気にしないで進む方が、かしていきまってる。

だが、そのかしてさの先に何かがあるのか。

小さな釣り針のような違和感で糸をたぐる。

道を、外れる。

前川知大[まえかわ・ともひろ]
／劇作家、演出家。イキウメ、カタルシツを主宰する。活動の拠点とするイキウメは2003年結成。『天の敵』『散歩する侵略者』『獣の柱』『聖地X』『関数ドミノ』『太陽』他、オリジナルのSFやオカルト、ホラー作品の創作と発表、公演活動を続ける。超常的な世界観で、日常生活の裏側にある世界から人間の心理を描く。見立てと、空間・時間を同時に編集するシームレスな演出を特徴とする。



INTERVIEW:1

わからないものと、わからないまま、
どうやって付き合っていくのか。前川知大

聞き手 矢作勝義 種の国とよはし芸術劇場ロレ「芸術文化プロデューサー」

作・演出

矢作—— 昨年上演しようとしていた「外の道」は、緊急事態宣言等で、上演ができなくなった後にワーク・イン・プログレス(以下、W.I.P)を踏まえて、何か変化はあったのでしょうか。

前川—— キャラクターとかエピソードとかは残っているのですが、全然違うものになってしまいました。アイデアやプロットを作り、その後、ある程度結論を見ながら台本を書いていったのですが、結局公演ができず。W.I.Pに移行して、発表は1年後だと思ったら、すごく楽に、それもすごく無責任な状態で書けたのが、おもしろい作業で、それはそれで良かったです。昨年3～5月、コロナによってかなり不透明な状態に置かれてだいぶ疲れた時に、「わからないものと、わからないまま、どうやって付き合っていくのかをテーマにしてやろうか」とみんなで話していました。その中では、ある種結論を出さず、それまでの社会に求められていた合理性が成り立たなくなった不安な状態にどれだけ耐えて、正しい選択をしていけるのか、というのがテーマだったんです。それは、今まで書いてきたものの延長線でしたが、1年たって、不安から絶望の方にきてしまいました。今の日本の社会の仕組みが、コロナによる混乱にまったく対応できないのを目の当たりにして、ただ不安だけでは駄目で、変えていかなくてはいけないと、多くの人が思っています。僕もそうでした、でもその元気が出る前に、毎日毎日ニュースを追いかけていると、政治やマスコミ、自分も含めた市民のコロナに対するピントのずれた振る舞い方に、ガクッと来てしまう。そういった1年を経た今回の作品は、巨大な絶望の話になってしまった。去年のW.I.Pでは、フワッとした「ちょっと様子を見ようじゃないか」みたいな雰囲気があったのですが、今回は最初から登場人物たちが、「もう駄目だ」からスタートします。

この作品では、小学校の同級生2人が、まったく違う町で、お互いその町に住んでいることを知って再会するところから始まります。近況報告をするうちに、お互いにだいぶ行き詰まっていると知る。じゃあ最近どういうことがあったのかと、2人のエピソードが語られていきます。そのエピソードは具体的には現在の日本や、コロナのこととは関係がありません。でも2人が覆われている不安感や絶望感は、この1年の気分を反映したものになると思います。もちろん楽しい芝居にしたいとは思いますが、結構重い作品になると思います。

矢作—— 絶望を描かざるをえない状況のなかで、前川さんは将来を見据えて、というか信じて、何がそこにあると思って作品づくりを進めていらっしゃるのですか。

前川—— 絶望を描こうとすると、どうしても「希望を探そう」という話になっていく。テーマは「コロナ社会に希望はあるのか」なんて言う雑誌の見出しのようですが、でも実際は切実にいろんな人が考え、試行錯誤している。僕は何か具体的な提言するというような作風ではないの

で、違うかたちでアプローチできたらと思っています。登場人物たちはすっかり暗闇に入っているの、なんとかそこを抜けさせないといけない。彼らはなんとか光を探そうとする。その姿勢の中に何かヒントを見付けられたらと思っています。

だから今回の作品は、謎を謎のまま残し、お客さんにも一緒に考えてもらうような形になっています。結論を求めず、登場人物の行動とお客さんの現在が響き合うように、物語に象徴性と暗示をちりばめて、こちらから問いを渡すようなものになっています。今、日常が不安定だから、劇場に来てスッキリしたいということもあると思うんですが、そういうものはテレビでもやっている。あえてお金を払って演劇に来るのだったら、どつぶり、自分自身の今の不安と向き合ってもらう方が刺激になると思っています。ただ、ひたすら問いや謎を投げかけられるだけだとお客さん疲れるから、おもしろいシーンや展開は用意しながら、バランス取ってやっています。

矢作—— 前川さんにとって、イキウメという劇団で作品を作ることはどういうものなのでしょうか。

前川—— プレッシャーが少ないので、余計なこと考えず、いろいろ実験というか、チャレンジできる場所は貴重です。作品を書く段階ではいろんな人の意見をあまり入れないほうが良く、作る段階では、みんなの意見を逆に拾えるような、オープンな状態で俳優もスタッフも居られる、そういう環境、稽古場にしないでいい。そういうことを全員が共有できている。そういう点ではフレキシブルに動ける。だから、初めて関わるスタッフさんや俳優さんでも、まずそこを共有してもらって、こういうふうに関わってねと言うし、逆にスタッフや劇団員たちは、自分たちが持っている当たり前なものを忘れないようにというのも大事にしています。

納得できないと舞台に乗っかるから。あくまで納得してやってもらうことと、自分で出したアイデアは、責任持ってやる。納得できなかったとしても、納得できないことがわかったうえでやってということが大事だと思います。

全員がそれぞれプランナーみたいなところもあるから。彼らの意見も、ステージを重ね、毎日ちよつとずつ変わっても、全体的にはブレの少ないものを作るには、しつこく話すことしかない。でも、毎回毎回準備が万全ではない中で、スタッフも俳優もちゃんと初日に向けてバシッと、結構高いボーダーラインをクリアし、初日の安定感はずごいないつも思います。

矢作—— 最後に、豊橋のお客様に向けて、メッセージをいただけますか。

前川—— 純粹に劇団で新作をゼロから作るのは久しぶり。それで豊橋に初めて行けるのは、うれしいです。劇団としても作品としても、今までとはちよつと違った段階に来ているので、楽しみにしていただけたいと思います。

矢作—— ありがとうございます。楽しみにしています。

INTERVIEW:2



——— 今回推奨年齢が4歳以上で、大人の人まで幅広い年代層に楽しんでもらうために、どのような工夫をされているのでしょうか。

藤田—— 子どもだけが観て楽しめる演劇というよりも、子どもも大人も一緒に楽しめる時間をつくろうと考えました。ただ、子どもを飽きさせないとすると、いわゆる「物語」を描くだけではダメだということを知りました。大人も懐かしく感じることができて、会場全体を巻き込むようなゲームの要素を流れのなかに組み込んだり、視覚的にも面白いシャボン玉を用いたり。それまでやってこなかった、俳優が“歌う”ということをしてみたり。

——— あえて大人から子どもまでを対象とした作品を今回作られたきっかけをお聞かせください。

藤田—— マームとジブシーの初期作品は、僕自身が18歳までの地元での記憶を手がかりに製作したものが多かったんです。26歳の時に岸田國士戯曲賞をいただいた作品も自分の家族をモチーフに描いた作品でした。幼少期や10代ころの記憶を扱うということは、俳優さんにそのころの年齢の役を演じてもらうことになるわけですね。それが徐々に、2011年から福島県立いわき総合高等学校の高校生との作業や、音楽家の大友良英さんと福島の中高生が出演するミュージカルを製作するという体験をして、実際の10代の子どもたちが僕の作品に出演するということが自然と増えていきました。そんな時、彩の国さいたま芸術劇場の方から、子ども向けの作品をつくってみませんかと声をかけていただきました。福島でつくったミュージカル『タイムライン』で、三年間かけて出会った子どもたちは100名以上います。その先に何ができるかと考えた時に、今度は観客という立場の子どもたちと上演時間内に関わってみたいと思ったんです。そうすれば、より多くの子どもたちと関わることができる。“子ども”という存在を様々な形で対象にしていくというのは僕の活動の流れとしては必然的なことでした。

いつもの作品に比べて、客席にいる観客のみなさんの反応がすごく気になりますね。客席の空気感や反応が毎回まるで違うし、上演中何が起きるかわからないので、客席との駆け引きを僕だけではなく、俳優も含めた



森の中に女の子が旅に出る。 そして幻想を見て帰ってくる。 藤田貴大

作・演出

チーム全体で考えないといけない。この作業を経て我に戻ると、僕はこれまでただ観客に一方的に見せるだけの演劇をつくりすぎていたのではないかと。考え方というか根本的な観点も見つめ直すことができました。だから、この企画を通して今も演劇表現の勉強をし続けている感じです。

——— 『めにみえない みみにしたい』はどんなところから発想されて作られたのですか。

藤田—— これは、僕が子どものころ、母親が僕を寝かしつけるために枕元で聞かされていた物語がもとになっています。当時間かされていた物語は「暗い暗い森の中に」、「暗い暗いお家がありました」、みたいな怖い呪文のような言葉で始まって、「お家の中に部屋がありました」「お部屋の中に押し入れがありました」「押し入れの中に箱がありました」として、最後「おばけがいました」で終わる。それがずっと怖くて、大人になっても弟と、「あの話ってなんだったんだろうね」となるくらい変な物語でした。

『めにみえない みみにしたい』を製作中にこのことをふと思い出したので、最初のシーンは「暗い暗い森の中に」というセリフで、俳優さんが絵も文字も書かれていない真っ白な絵本をめくることから始めました。

この作品の物語としては、一人の女の子がお母さんに促されて真夜中の森に旅に出て、森の中で色々な不思議な生き物に出会ったり、幻想を見たりして、最後にお母さんがいる自分の家に帰ってくる。という童話のデフォルトのようなシンプルなものだと思います。不思議な展開も多々あるので、大人は唐突さを感じてしまう部分もあると思うのですが、でも子どもは自分の想像力で飛び飛びになっている物語の余白の部分を補填してくれるので、色んな設定に対して違和感を全く持たないんですね。その反応が面白かったです。

——— 子ども向けの作品を作るにあたり、音楽を原田郁子さんにお願いされた意図をお聞かせください。

藤田—— ひめゆり学徒隊をモチーフにした『cocoon』という作品で郁子さんに音楽として初めて関わっていただきました。その作品では多くの子どもたちの「死」に向けての作業でした。そんな流れもあって、郁子さんと“子

ども”に向けて違うアプローチでもう一度作業をしてみたいと思ってお願いしました。それで、郁子さんとは最初から今度は子どもたちが死ぬことのない物語をやりたいねという話をしていました。子どもたちが目にするものが綺麗でありますようにと願ったり、僕らが子どもたちに耳にしてもらいたいと思う音をじっくり作っていきたいよね、と。同時に大人が聞いても「渋いねえ」と言われるような、子ども向け特有の甘いだけの音楽は避けるように構成しました。

——— 過去にマームとジブシーの作品を観たお客様が、お子さんを連れて一緒に観に来るのではないかと思うのですが。

藤田—— この企画をやりたいと思った理由の一つにそれがあって。僕らは演劇をずっと作り続けていますが、かつての大学生や僕らと同じ年代の人たちが子どもができたことによって、以前のように劇場に来られなくなったり、演劇との距離が空いたりしている人も少なからずいると思うんです。演劇を観に行きたいけど、なかなか行くのが難しくなったという人たちが、また訪れることができるような場を作るというのも一つの大きなコンセプトでした。

そしてたとえ、子どもが上演中に泣き出してしまったとしても、そのことが他の観客に迷惑に思われることのない、誰もが許容されるような場を空間として成立させたいと思うんです。劇場の椅子に座って暗闇の中、静かに演目を観ることだけが演劇の鑑賞じゃないと思うし、この作品のツアーをする意味というのは、“よくできた作品”を持っていくというだけじゃないと思うんです。そこにいる人の数だけ楽しみ方があって、その一つ一つが許容されている風通しのいい空間づくりの手つきを感じてほしいし、そういう意味で行き届いたツアーをすることが大事だと思っています。こうして成立している演劇とか空間があるということを各地に持っていきたいし、いろんな現実によって演劇を見るのを諦めていた人も「これだったら劇場へ行けるよね」ということを実感してもらいたいです。

——— ありがとうございます。豊橋での上演をとっても期待しています。

8月28日[土]11:30開演／15:00開演

8月29日[日]11:30開演

作・演出＝藤田貴大

音楽＝原田郁子

衣装＝suzuki takayuki

出演＝伊野香織、川崎ゆり子、成田亜佑美、長谷川洋子

会場＝PLATアートスペース

プラット親子わくわくプログラム2021

『めにみえない みみにしたい』

子どもから大人まで一緒に楽しめる演劇作品

藤田貴大[ふじた・たかひろ]／1985年生まれ。マームとジブシー主宰、演劇作家。2007年にマームとジブシーを旗揚げ。象徴するシーンのリフレインを別の角度から見せる映画的手法で注目を受ける。2011年に3連作『かえりの合図、まっけた食卓、そこ、きつと、しおふる世界』で第56回岸田國士戯曲賞を受賞。2015年第23回読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。演劇作品以外でもエッセイや小説、共作漫画の発表など活動は多岐に渡る。2020年7月初の小説集「季節を告げる蠢蠢は夜が知った毛毛毛毛」(河出書房新社)を上梓。

—————2018年に初演された『めにみえない みみにしたい』は、マームとジプシー・藤田貴大さんにとって初の“子どもと大人が楽しめる作品”です。クリエイションの段階から、普段との違いを感じていましたか？

全員—— はい。

川崎—— 観客の反応をこんなにも想像しながら作ったことはなかったと思います。

長谷川—— 藤田さんから「これ届くかな?」「子どもたちが楽しい遊びってなんだと思う?」ってよく聞かれて。みんなでかなり、試行錯誤しましたね。

伊野—— 稽古の初日に、みんなで駄菓子屋に行って子どものおもちゃを買ったんです。

成田—— 子どもがあまりに未知すぎて、何をしたら楽しんでもらえるのか、知ろうということになって……(笑)。ただ藤田くんの中では、森をモチーフにするとか、最初から物語はあったと思います。

伊野—— 誰に何の役をやらせるか、ということも明確に決まってきましたね。

川崎—— “演じる”という点では、それまで1回も子どもの前で演じたことがなかったので、どんなテンションで演じたらいいのかすごく戸惑って。ゲネで初めて子どもに観てもらって、むしろもっとテンションを上げないとダメなんだ!って思い知りました(笑)。

成田—— 視線を合わせるのも、子ども扱いしているようで失礼なんじゃないかって思ってたんだけど、物語を届けるにはそれが大事だということを実感しました。

—————『めにみえない みみにしたい』では、長谷川さんが「こんにちは」と客席に挨拶しながら登場し、それが開演の合図となります。藤田作品には珍しいオープニングですね。

長谷川—— 確かにそうですね(笑)。舞台に出て行ったとき、「なんか出てきた」って子どもたちがざわつき始めて、それまでお客さんから話しかけられることがなかったので、こちらも戸惑って(笑)。でも「こんにちは」って挨拶すると、不信感を抱きつつもみんな大声で「こんにちは!」って返してくれるんです。純粋なレスポンスが返っ



夜の森へ誘うのは、この4人！『めにみえない みみにしたい』キャストインタビュー

伊野香織・川崎ゆり子・成田亜佑美・長谷川洋子

てきたことがうれしかったですね。

川崎—— 私たちも、舞台裏で客席の反応を聞いて思わず声を殺して笑ったり、動揺したりしてたよね？

成田—— 「こんなに返してくれるんだ〜」って感動してた(笑)。

伊野—— そういう子どもたちの反応を受けて、上演中もどんどん演出が変わっていきました。例えば私が金色の紙吹雪をまくシーンは、子どもたちが紙吹雪に夢中になりすぎちゃうので、どんどん量が減って結局紙吹雪ナシになったり(笑)。

長谷川—— アクティングエリアにもどんどん入ってきちゃうほどの熱狂ぶりだったね。

—————シャボン玉のシーンも、子どもたちは立ち上がってシャボン玉を追いかけるほど、大興奮していました。

成田—— 舞台を観に来てくれた大友良英さんが、子どもたちがシャボン玉をパチンパチンと手で捕まえようとしている様子が素晴らしい、と行ってくださって。

川崎—— 「子どもが楽しんでいる状況込みで、良い作品だった」と言ってくれる方が多かったですね。

長谷川—— 「子どもが観る作品だからと油断して観始めたけど、面白くて見入っちゃった」と言ってくれた方もいました。

—————『めにみえない みみにしたい』は初演の翌年にツアーを行い、全国14都市で上演されました。藤田さんはそのツアーを経て、作品がとても強くなった、作品が俳優たちのものになったと以前おっしゃっていましたが、皆さんにとってその実感はありましたか？

成田—— この作品は、他の作品以上にお客さまが入って完成する度合いが高いのと、子どもは飽きちゃったのか、楽しんでくれるのか、反応が手に取るようにわかるので、舞台上で自分たちが臨機応変に対応しないといけないことが多くて。それで強くなった部分はあると思います。

川崎—— イレギュラーなことが本当に多い作品だから、ある程度自分たちのものにしないと、融通が効かな

いというところはあったと思いますね。

伊野—— だからすごく鍛えられたなという実感はあります。

長谷川—— 作品世界に入り込みつつ、素の自分もいて、それを客観的に見る自分もないと子どもたちのレスポンスに対応できないので、そのバランスが難しいんです。でも1人で頑張ってる感じじゃなくて、みんなでなんとかしようっていう意識なので、団結力が強くなったとは思いますが。

川崎—— パスケのチームとか、バンドの感じに近いのかな。

長谷川—— 確かに!ライブをやってる感じに近いのかもしれない。

—————『めにみえない みみにしたい』に続く第2弾として、去年は『かがみまどとびら』も誕生しました。2つの“子どもから大人まで一緒に楽しめる演劇作品”シリーズを経て、皆さんの意識が変わった部分はありますか？

伊野—— さっきの話しとつながりますが、舞台での居方が強くなったと思います。演じることだけでなく、客席の反応を見る客観的な自分が、その反応をエネルギーに変えて舞台に立っている感覚がすごくあります。川崎—— 子どもは反応がすぐ見えるけど、大人だって実は、飽きたけど我慢して観ていたり、声を出したいのをセーブしているんだろうなと思うようになりました。

長谷川—— 私も、わざわざチケットを買って来てくれるお客さんは、この時間を楽しもうと思って来てくれるんだ、と思うようになりました。

成田—— 私はこの2作を通して、藤田くんの優しさというか、「この先、子どもたちに傷付かずに生きていってほしい」っていう藤田くんの強い思いを感じて、そういう作品に携われて幸せだなと思っているんだよね。あとは……このシリーズに出た後の違う公演のとき、あまりにお客さまの反応がなくてちょっと不安に感じたけど、ああとうだこうだったってすぐに思い出しました(笑)。

取材・文：凜

プラット親子わくわくプログラム2021

『めにみえない みみにしたい』

INTERVIEW:3

——— 田中圭さんが鈴木おさむさんと舞台でタッグを組まれるのは4年ぶりですね。

田中—— そうですね。『芸人交換日記～イエローハーツの物語～』(2011年)、『僕だってヒーローになりたかった』(2017年)に続いて、これが3作目になります。

——— 前は田中さんから鈴木さんにお声掛けされた舞台だったと伺いましたが、今回は?

田中—— ちょっとよく覚えてないですが、どちらからというわけではなく、前回のときに「4年後にやりましょう」みたいなお話をしていたんじゃないかな? だから、本当は久しぶりに一緒にやるはずだったのですが、去年の暮れにドラマでご一緒してしまったので、久々感がなくなってます(笑)。

——— (笑)。まだ台本は完成してないそうですが、プロットは読まれましたか?

田中—— 実はまだ読んでないです。だから現時点で僕が知っているのは、1年以上前に餃子屋でおさむさんと会ったときに聞いた話だけ。確か「絵を描くことで命を与える」という内容だったので、それがこの『もしも命を描けたら』なんだと思います。

——— 前作は田中さんへの当て書きでしたが、今回は鈴木さんが元々温めていらした作品なんですね。

田中—— 前回は完全な当て書きではなく、元々おさむさんの中にあつた話を僕に合わせて完成させたという感じでした。おさむさんの中にたくさんあるストックの中から「圭くんにはこれが合うだろうな」というおおまかなプロットを出してきて、そこに僕への当て書きが入ってくるというバランス。だから今回もおそらくその形だと思います。

——— 前回、前々回の舞台や昨年のドラマでも長台詞がありました。今回はどうですか?

田中—— 聞いてはいませんが、どうせあるだろうなと覚悟しています。これまで何度もご一緒していますが、おさむさんは絶対僕に長台詞を課すんです。それにはもう慣れているので文句とかは一切ありませんが、年々台詞の覚えが悪くなってきているので、それだけが心配ですね(笑)。

——— 田中さんは毎年必ず舞台に出演されていますね。舞台に対して何か信念をお持ちなのですか?

田中—— 僕にとって舞台は、お芝居と向き合うためにとっても大事な時間なんです。もちろんドラマや映画といった映像のお仕事でも向き合っていますが、なかなかじっくり時間をかけられないことが多いので、どうしても向き合い方が変わってしまう。だから舞台をやらないと駄目だなという思いがずっとあって、年に1本はやると決めているんです。お芝居とちゃんと向き合い、初心にかえるために。去年はたまたま舞台を入れていなくて映像のお仕事を色々やっていたんですが、正直「今、舞台やりたくないな」とも思うんです。「このまま流されちゃいたいな」っ

て。だからこそ今やるべきなんだろうな、舞台でお芝居の楽しさを味わうべきなんだろうなと強く思っています。

——— 映像の現場では味わえない、舞台ならではの面白さとは何でしょうか。

田中—— 面白くはないんですけどね、舞台。全体的にしんどい。いや、面白いんですけど……何て言えばいいですかねえ……。舞台ってごまかせないじゃないですか。お芝居というものから逃げられない。映像は演出やカット割りや編集という要素もあるし、撮影時間が短かったりして、とことんまでお芝居と向き合わなくてもどうにかなってしまう。もちろん、向き合わないといけないのですが、でも舞台はそれがないので、逃げられない。そういう感じですよ。

——— 観る側としては、どんなところに舞台の面白さや魅力を感じますか?

田中—— 僕は舞台を観るのも好きですが、やっぱり生の空気感っていうのは舞台ならではのものですよね。お芝居が元々持っている力は舞台でこそ届くと思うので、生を楽しんでいただきたいなと思います。でも楽しみ方は人それぞれなので、お客様には好きに楽しんでいただければ嬉しいです。

——— 今回は地方公演もありますから、「東京まで行くのはハードルが高いな」と思っている方々にも、ぜひ観に来ていただきたいですね。

田中—— そうですね、ぜひ。それにおさむさんの舞台はすぐ見やすいので、舞台を観たことがないという方にもめちゃくちゃおすすめです。しっかりとストーリーやお芝居を楽しめて、取っつきやすいけどショーにぶれすぎてもいない、ちょうどいいバランスだと思います。舞台って、舞台を観たことがない人でもわかりやすく楽しく観られるような、ショーに近い作品もあるじゃないですか。一方で、初心者は「何だこれ」ってなるような、玄人好みの難解な作品もある。もちろんその凄さや面白さはあるし、そういう作品も大事なんです。そんな風に色々な舞台作品がある中で、おさむさんの舞台はちょうどいいバランスだし、オリジナル作品だから「劇場に行かないと絶対に味わえない」という特別感もあるので、舞台初心者の方にもおすすめしやすいと思います。

——— 頻繁に劇場に行く方にも、今まで観劇したことがない方にも、ぜひお越しいただきたいですね。

田中—— 本当に見やすい、敷居の低い舞台にしたいと思っているので、ぜひ気軽に来ていただきたいですね。最近のおさむさんは「ちょっと奇をてらったことをやりがちな人」みたいに思われてると思いますが、シンプルなお話の中に伝えたいものや心に響くものがあるというのが、おさむさんの真骨頂。誰もが共感できることを面白く伝えられる方なので、きっとチケット代以上の経験と感動を持って帰っていただけると思います。

インタビュー・文:熊倉久枝

『もしも命が描けたら』

9月10日[金]18:00開演
11日[土]13:00開演 / 18:00開演
12日[日]13:00開演
作・演出=鈴木おさむ
出演=田中圭、黒羽麻璃央、小島聖
会場=PLAT主ホール

田中圭[たなか・けい] / 1984年7月10日生まれ。東京都出身。2000年にデビュー。TVドラマCX『WATER BOYS』(03年)で注目を集め、その後、数多くのTVドラマや映画作品に出演。2007年には『死ぬまでの短い時間』(演出:岩松了)で舞台にも進出。『幻蝶』(12年/演出:白井晃)、『かもめ』(16年/演出:熊林弘高)、『僕だってヒーローになりたかった』(17年/演出:鈴木おさむ)、『江戸は燃えているか』(18年/演出:三谷幸喜)、『サメと泳ぐ』(18年/演出:千葉哲也)、『CHIMERICA』(19年/演出:栗山民也)と多くの舞台作品に出演し、映像・舞台の両方で幅広い活躍を見せている。



若手音楽家育成事業 2021年上半期 コンサートラインナップ決定!

2021年度上半期の若手音楽家によるコンサートのラインナップが決定しました。豊橋および三河地域ゆかりの才能ある若き音楽家と共に、多彩なコンサートをお贈りします。

出演するのはプラットワンコインコンサート出身のアーティスト3組。プラットワンコインコンサートとは、「若手音楽家に活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」というコンセプトのもと、オーディションで選ばれた若手音楽家たちによる音楽のひとときを提供してきたPLATオリジナルのコンサート企画です。以前の出演から数年の月日を経て、さらに実力をつけた若手音楽家による個性豊かなプログラムに、ぜひご注目ください!

なお、下半期は今年度オーディション合格者によるプラットワンコインコンサートを開催予定です。どうぞお楽しみに!

[コンサート情報の詳細は12頁(INFORMATION)をご覧ください。]

Le deux mai [ル・ドゥーメ] / 2016年結成。Le deux maiはフランス語で5月2日を意味し、お互いの誕生日にちなんで名付けた。東京藝術大学在学中よりコンサートやアウトリーチ活動を展開し、打楽器とピアノという組み合わせの可能性を模索すべく様々な種類の打楽器を使い自編曲にも積極的に取り組んでいる。心躍り、思わず体が動いてしまうようなサウンドを目指し日々活動している。



プラット親子わくわくプログラム2021 Le deux mai 交流スクエアコンサート

9月5日[日] 上演時間未定
会場=PLAT交流スクエア
《入場無料》

◆コンサートの見どころ

“ワークショップ緑日”と同日開催!打楽器とピアノのデュオ、Le deux mai[ル・ドゥーメ]による、大人と子どもと一緒に楽しめる無料のコンサートです。演奏するのは「バイナブル・ラグ」や「ツィゴイネルワイゼン」など、きっと聴いたことのある楽しい曲ばかり。弾むようなリズムと賑やかなメロディーが交流スクエアいっぱいに広がります。

◆出演者メッセージ

今回はマリンバとピアノを中心に、皆さまご存知のあの名曲!?!をソロ・アンサンブルで演奏します!普段はあまり聞くことのできない楽器の歴史や構造にも触れながら、皆さま楽しんで頂けるよう、明るく!元気に!お送りします!!!

犬塚沙希 ピアノ・リサイタル 『共鳴するところ』

7月24日[土] 14:00開演
会場=PLATアートスペース

犬塚沙希[いぬづか・さき] / 愛知県立明和高校音楽科、愛知県立芸術大学音楽学部器楽専攻ピアノコースを経て同大学大学院音楽研究科博士前期課程修了。第24回日本クラシック音楽コンクールピアノ部門大学女子の部第5位。大学内選抜による、定期演奏会、新進演奏家コンサート等に出演。現在、東海地方を中心に、ソロ、アンサンブルの演奏活動と、後進の指導にあたる。

◆コンサートの見どころ
ショパンを軸とした4人の作曲家作品を集めたプログラムです。前半はピアノソロ、後半はプラットワンコインコンサートにも登場した Trio Katzeのメンバーと共にメンデルスゾーンの名曲「ピアノトリオ第1番」を披露します。ダイナミックさと繊細さ、情感溢れるピアノの音色と、息の合ったアンサンブルにご期待ください。

◆出演者メッセージ
ショパンは半生をパリで過ごし、パリ社交界で、ドイツ生まれのメンデルスゾーンと出会います。その約半世紀後、パリで活躍したラヴェル、ショパンの影響を受けた若年期のスクリャービン…名曲を残してきた作曲家たちは皆、過去の作品を研究し、同時代の芸術家との交流を通じて、数々の作品を残してきました。その中にある、共鳴するところを垣間見れたら、と思います。

竹田江梨子[たけだ・えりこ] / 東京都出身。日本大学芸術学部を首席(総長賞)で卒業し、同大学院芸術学研究科博士前期課程を修了(芸術学修士)。2008年に東京でソロリサイタルを開催し、以降ソロ・室内楽・伴奏などで全国各地のさまざまな演奏会に出演。2015年より拠点を豊橋に移し、2017年後期/18年前期プラットワンコインコンサートに出演。国際ピアノデュオ協会会員、カトリック豊橋教会オルガニスト。



竹田江梨子 ピアノ・リサイタル 『ソナタ・レミニシェンツァ ～回想のピアノをしてその先へ～』

10月7日[木] 14:00開演
会場=PLATアートスペース

◆コンサートの見どころ

日本では希少なドイツ製のピアノ、グロトリアンの音色を多彩に引き出す竹田江梨子さん。今回もこのグロトリアンと共に、様々な時代を想起させるようなプログラムをお届けします。個性豊かなトークと豊富な知識による楽曲解説を交えながら、一曲一曲をじっくりと楽しむことが出来るコンサートになりそうです。

◆出演者メッセージ

昨年から続く、このコロナ禍の世界と、そしていつかは収束してやって来る新しい時代、それらをピアノ曲で表現できるとしたら、何が出来るだろう?やってみよう!という欲求が沸き上がり、メトネルの「回想ソナタ」を軸としたプログラムを企画するに至りました。劇場で皆さまにお会いできることを楽しみにしています。

「エンタメにデアイマSHOW」
桑原裕子 芸術文化アドバイザー



「逢えない人がおられますか それを悔やんでいるのですか あなたのせいではないんでしょう さあ気を取り直して シブヤデアイマSHOW!」

この4月、私はBunkamuraシアターコクーン主催、松尾スズキさんが総合演出を務める『シブヤデアイマSHOW』という舞台に出演していました。「大人の歌謡祭」と称したこの舞台は、演劇はもちろん、歌やダンス、ミュージカルに漫才に歌舞伎まで詰め込んだエンターテイメント・ショー。冒頭の一文はオープニングで歌曲の一節で、その後には「もうんざりなのディスタンス」……などと続くのですが、おわりの通り、この作品では全編を通して真っ向からコロナ禍のあれこれについて歌や笑いにしています。

主人公はのんちゃん演じる青年。彼は訳あって東京はシブヤの劇場へ就職することになるのですが、舞台の仕事にまったく興味がありません。突然現れた犬…ハチ公を追って町を彷徨い、まるで「アリス・イン・ワンダーランド」のように不思議の国シブヤを徘徊するうち、あらゆるジャンルのショーに遭遇していく…というお話。

この公演には動画配信はありません。ご覧いただければ納得して頂けたはずですが、劇中では渋谷だけでなく、あらゆる地名、登場人物たちが実名で登場し(もちろん私も桑原役です)、様々な名曲が現代社会の風刺あふれる歌詞と共にパロディされています。私は杉原邦生さん演出による『関所(肝心帳)』というコーナーに出演しました。お察しの通り「あの」歌舞伎が下敷きとなっています。杉原さんは実際にスーパー歌舞伎なども手がけておられるので、リスペクトを大前提に確かな知識の元で演出して下さったわけですが、なか

なかどうしてチャレンジな企画ですし、まあこれを映像で配信するのは無理だろうなあと改めて思った次第です。

歌やダンスに乗せながら、コロナで抱える鬱屈や社会的苦境をも(決して軽んじてるわけではなく)シニカルな苦笑と爆笑に転化させ、ライブでしか見られないもの、今この瞬間にしか体験出来ないことを徹底的に愉しんでもらうショー。

とうか、こんなやり方があったんだ。私は舞台上に立ちながら、久しぶりに見た満員の客席と、そこに溢れるマスク越しの笑い声に胸を熱くしつつ、この一年半抱え続けたある問いへの突破口を見たような気がしました。

昨年から度重なる緊急事態宣言で、数多くの舞台やイベントが中止になり、そのたびに多くのエンタメ業界に関わる人たちが「文化芸術は生きるために必要だ」と訴えました。必要だなんて本来ならわざわざ口にするでもない、これまでの私にはとってごく当たり前のことでしたが、実際は反発する声も少なくありませんでした。演劇なんかなくたって困らない、はっきりとそういう言葉をSNSなどで幾度も目にしました。それでもなんとかクラスターが起きないよう感染対策しながら上演をつづけてきましたし、劇場にお越し頂いたお客様や、配信でご覧頂いた方々にはたくさんのお励ましの声も頂きましたが、一方で「だったら無観客配信だけやれば良いじゃないか」と、今度はまた別の角度の声も出てきました。そのたびに私は悲しくなったり憤ったりしていましたが、どれほどSNSに気持ちを持ちを紡いでもなかなか伝わるものじゃありません。例えばこういう社会の声を否定せず、反発や分断を起ささない形で、かつ演劇ならではのやり

方で理解を深め合うことは出来ないだろうか。しかも、ここが一番重要なんですが、「ものすごく面白いやり方で」。そのひとつの答えが「シブヤデアイマSHOW」にあった気がしたのです。

例えば過激でテレビでは言えないようなことや、日替わりゲストのトークや漫才も、体験出来るのはその劇場に行った人だけのもの。のんちゃん演じる青年は、舞台後半で自らも裏方として劇場で働きながら、観客と一緒に、小劇場のアンダーグラウンドな面白さやお笑い芸人が生み出す笑い、生バンドとプロのミュージカル俳優たちによる本格的なショーを次々と目の当たりにし、やがて極めてシンプルな、心震える発見をします。それは…、「エンターテインメントは、いい」

不要不急かもしれない。生きるために必要なものはもっと他にあるのかも知れない。でも、ただひと言言えるのは、舞台って、エンターテインメントって、いいものだ。

三度目の緊急事態宣言発令により、千穂楽はあえなく中止となりました。ライブならではの徹底してきた舞台だけに「無観客配信ならOK」という決定は、あまりにも雑に残酷に響きました。ですがここには、間違いなく今しか創れない作品があった。そしてこれからは作り続けていける、そう思いました。なぜなら、エンターテインメントは、いいものだから。

それでは締めくくり、ショーの終わりに歌われた楽曲「トーキョー・シック」からの一節を。すぐに叫ぶかどうかは別として、よければ皆さんも歌ってください。

「世の中 嫌なことばかりじゃない 落ち込んでないで 街に出かけようよ!」

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

YOSHINO ASSOCIATES
architect & engineers
吉野設計研究所
http://www.440a.co.jp

魚伊 有限会社
電話 52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役 竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒443-0007 Tel.053-422-3628(代)

グロリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話 053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23 (豊橋市竹内産婦人科) 院長 氏

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町160-9 障害年金専門社会保険労務士 竹下英司

看板広告 アラキスタジオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

ONOCOM なければつくる
株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間
数きく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行
三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行
十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

創業江戸 喫茶茶菓子専門店
若松園
御菓子司

西村能舞台
豊橋市上伝馬町
代表=西村 隆二
Mail=nnbuitai@gmail.com

気まぐれコンサート
事務局/0532-62-9259(小川小司)

安心・安全な地下駐車場
パワ500 ソコの親子の看板が自印
プラット主ホール・アトスペース公演等へのお客様は30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌 院長 塩之谷 香 副院長 市川義明
豊橋市植田町閑取54 電話 0532-25-2115(代)

豊橋名産 **傘あくわ**

井上皮膚科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00~13:00 16:00~19:00
土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝
電話 0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市兵衛町四拾四番地 電話52-5514

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

生活にファインクオリティ
sala

生活にファインクオリティ
PLAT

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター
電話・窓口
0532-39-3090 [休館日を除く 10:00-19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]



プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

- 特典
- 1 公演情報をメールでご案内します。
 - 2 インターネットでチケット予約ができます。
 - 3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
- ※劇場窓口またはホームページから登録いただけます。

U25・高校生以下割引のご案内

- ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
- 料金
U25[25歳以下]:公演ごとに指定する座席の半額
高校生以下:1,000円
 - 購入方法
各公演の一般発売初日から取扱い。
 - その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。
一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。



〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話=0532-39-8810[代表]
開館=9:00-22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT